

日本の伝説 25

森山泰太郎・北彰介

青森の伝説



青森の伝説



日本の伝説 25

森山泰太郎

北彰介

角川書店

〒550 大阪市西区江戸堀2-3-4
-0002

S.U. 中国へ本を贈る会本部

(大阪花甲協会贈書会)

電話 06-441-4397

森山泰太郎（もりやまたいたろう）

大正4年（1915）青森県生まれ。国学院大学高等師範部卒業。東北女子大学講師，青森県文化財保護審議委員。日本民俗学会評議員。主要著書『津軽の民俗』（陸奥新報社）『砂子瀬物語』（津軽書房）『陸奥の伝説』（第一法規出版）

北 彰介（きたしょうすけ）

昭和元年（1926）青森県生まれ。青森師範学校卒業。日本児童文学者協会会員，青森県児童文学研究会会長。主要著書『へえ六がんばる』（岩崎書店）『せかいいちのはなし』（金の星社）『あかいくし』（津軽書房）

日本の伝説（第Ⅲ期）全6巻

25 青森の伝説

昭和52年12月10日 初版発行

著者 森山泰太郎
北 彰介

発行者 角川春樹
印刷者 中村武
製本者 宮田四郎
発行所 株式会社 角川書店



東京都千代田区富士見2-13
電話 03(265) 7111(大代表)
● 102 ● 東京 3-195208

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

信教印刷・宮田製本

0326-722025-0946(0)

目次

青森伝説散歩／森山泰太郎

南部路

糠部の里

黄金橋 河童のいぬ川 簀が坂沼 乳銀杏 まん子沼

メクラウナギ 蛇沼 旅人坂 布沼 鍵掛け 手長婆

足長の大男 団子坂 若宮八幡

貴人流寓の地

法光寺 長慶天皇のご潜幸 宝清水 十和田湖伝説 目

洗い清水 姉妹神 持仏塚 安倍八幡 エボシ畑 勝負

が沢 義経のジュネ畑 ハノ太郎 鶏コ林 鍵掛けの

木 山の背くらべ ホロド沼 白鷄神社 権現塚 ご神

火もらい 十三長根 オシラさまの罰 白旗鎧八幡

鮭のオオスケ

矢倉の崖 おほの荒れ 糠塚 足替え地蔵 義経石と弁

慶石 大祐神社 カン子の宮 白米城 片目の蛇 矢留

の泉 貝鞍沼 小田八幡 神の杉 七崎観音 ハノ太

郎 メドチの糸巻 座敷童子

坪のいしづみ

乳銀杏 シマツ田 影沼 牛沼 ハノ太郎 木に登る河
童 魚住まぬ川 石ケ戸 姫が塚 山屋の薬師 逆さ
杉 行人塚 鞭柏 田村蒼前 壺のいしづみ

源氏の浜

千曳明神 將軍井戸 重軽石 乗馬とがめの神 メドチ
ハン 姉沼 八幡館 矢矧坂 安倍館 安倍八幡 嫁流
れ 石神様 白馬沼 七鞍平 御所の宮 薬師の湯 軽
石八幡 源氏の浜 手水沢 金鶏城

下北路

むつ・はまなすライン

恐山 鼻欠け十王 川端観音 縛り地蔵 神馬石 鼓
坂 夜泣き石 千軒平 左京沼 弘法井戸 蘇生の松
片目の薬師 茗荷嫌いの神 見返りの松 赤川 乗鞍の
池 脱衣婆

海峡の潮騒

血散り浜 雨降り地蔵 立石大明神 浪除け石 材木
石 牛滝 鍵懸岩 腰掛け八幡 矢越の崎 明神様 子
安地藏 仏が浦 墨流しの岩 八幡淵 鷺の湯 鯛島

四七

四四

三六

三三

成長石 琵琶石 常陸石 海尊社 海尊の投げ棄 蔵平
山

合浦路

錦木塚

諏訪神社の兜 錦木塚 雷電宮 化島 椿山 アネコ
坂 鍵掛け峠 オコリ石 鹿の湯 裸島 目無し蟋蟀
魚住まぬ川 貴船神社 ハナクリ岩 乳銀杏

善知鳥安方

山の争い 姉妹山 大人 酸カ湯 猿の湯 乗馬とがめ
の神 飢渴坂 ガンドウ橋 弁慶石 雨池 魚の住まぬ
川 イルカ参詣 荒はばき明神 白髭水 機織の宮 鶴
の湯 炭焼き藤太 金の鶏 善知鳥神社

義経渡海

雁風呂 阿弥陀川 桂淵 袋月 馬岩 飢渴坂 柳の
鞭 鞭銀杏 竜灯の松 既石 風祈りの観音 兜岩

津軽路

伝説の山・岩木山

山争い 小栗山 姉妹の神 安寿姫と津志王 アソベの
森 ウバ林 姥石 錫杖清水 赤倉の大人 鬼神社 オ

五 五

六

七

八 七

コリ柳 アグド石 鬼神太夫 乳柳 花咲き松の観音
 盲清水 飢渴坂 座頭石 水無し川 弘法の酒買い 先
 達が淵 身代わり地蔵

杭止の人柱

お銀の祟り 目洗い清水 白米城 鞭立桜 大人の足
 跡 鬼の足跡石 杭止の堰 石戸神社 浪切り不動機
 織淵 上皇堂 オオスケ・コスケ 新穂が滝 仏桂 化
 けもの淵 嫁が淵 マタギの塚 雨降り地蔵 鬼のツボ

美人川

鬼の湯 不動出汗 萩桂 はいはい沢 神石 矢捨山
 夜光石 菅田の泣き坂 四十巻場沢 猿賀石 片目の
 魚 蜘蛛の藤 グズ盛 唐糸御前 堰神社 美人川 楊
 枝杉 杖銀杏

八ノ太郎と南祖坊

牛石 一本杉 鹿が倉 獅子石 鶴の湯 杖柿 魚の手
 形 座頭石・イタコ石 題目石 布淵 八ノ太郎 蛾虫
 の一エビ 八郎石 南祖坊

西浜路

十三恋しや

オガリ山 義経の乗馬 中山の大人 七段坂 転び地

蔵 鬼の足跡 沈鐘湖 賽の川原 尼池 馬禿 川倉地
 蔵 白旗神社 葦毛沼 尾崎神社 丹後船 朝歌を嫌う
 一本タモ

二三

袴形の池 牛潟 高山稻荷神社 おしげ地蔵 一本タ
 モ 芦屋の七面様 弘法サルケ 乳銀杏 姫塚 十一面
 観音 雨血場 戻らずの沢 河童の詔証文 人食い沢
 鬼田 サメドノ川

丹後日和

二六

垂乳根の銀杏 アブラコの沢 吾妻の浜 瀬口の観音
 竜灯の杉 丹後日和 財宝埋蔵 賽の川原 白米城 猿
 の湯 大力三十郎 はいはい岩 ヨモギ餅を食べない
 的神岩 モドメ女の岩 白神山 夜泣き石

青森伝説十七選／北 彰介

二五

山の喧嘩

二七

黒神の嘆き

二三

ねぶた由来

二〇

悲恋の沼

一七

善知鳥物語

一五

安達ヶ原の鬼ばば

天皇山

銀杏の木と石になった桃

十符の浦風

龍神の刀

お玉かなしや

あわびの恩返し

白狐のおさん

おコンのかんざし

鯨橋

正太郎の秘術

七福神の井戸

民謡採集手帖へ青森へ竹内 勉

付・青森伝説地図

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

青森伝説散歩

森山泰太郎

南部路



糠部の里

南の岩手県境を越えて、青森県に足を入れたところが、三戸郡の三戸町。小さな町だがこの歴史は古い。

遠く鎌倉期に、源頼朝から奥州平定の功によって、糠部ぬかのぶとよんでいた本県の太平洋岸にあたる東半部地方を与えられた甲斐かい（山梨県）の南部なんぶ氏が、はるばると北奥に移住して来た。その初代南部光行の入国は、建久二年（一一九一）のことだという。

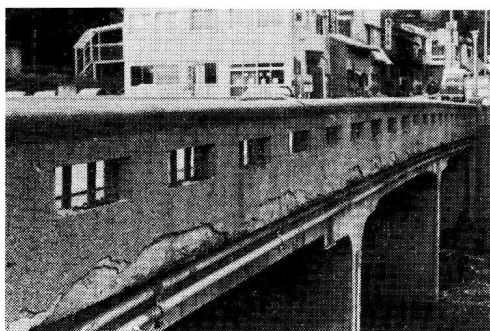
南部氏はここを本拠として勢力をひろげ、江戸時代初期の寛永十年（一六三三）、盛岡（岩手県）に居城を移すまで栄えたところである。今は隣接する新産都市八戸市の繁栄におされ、三戸駅前には南部町に占められている。駅からかな

り距離をおいて、ひなびた城下町らしい三戸の町並みが始まるのである。

町の中心部を流れる熊原川を渡る橋、それが黄金橋きがねである。南部一二代の政行が、後村上天皇に仕えて吉野（奈良県）の行在所あんざいしょにいたときのこと、春なのに鹿が鳴いて、不吉な兆きざしではないかと人々が不安がった。そのとき政行は、「春霞秋たつ霧にまがはねば思ひわすれて鹿や鳴くらん」と歌をよんだ。

天皇はたいそうおほめになり、松風という硯すずりをたまわり、また加茂川の橋の欄干らんかんについている擬宝珠ぎぼしを、城下の橋に用いることを許された。政行が国に帰って熊原川に橋をかけたとき、松尾長者という人が、橋の上に黄金を敷き並べて渡り初めをした。これから黄金橋とよぶようになったという。一説には、黄金の擬宝珠をつけたからこの名が出たともいう。

ところで、熊原川は河童かっぱのいぬ川である。そ



黄金橋。その名にふさわしくない現状だが、江戸時代につけた鉄の擬宝珠が、町の温故館に保存されている。

のことで次のような伝えがある。

昔、この川に住んでいた河童が、あるとき、川端で草を食^はんでいた馬を川に引き入れようとして、馬の手綱を自分のからだに巻きつけて引っ張ろうとした。ところがびっくりした馬は、

逆に河童を引きずったまま馬屋に逃げこんでしまった。

しかたなしに河童は、馬屋の中のトナ舟（飼料桶）をかむって片隅に隠れていたが、とうとう家人に見つかってしまった。家人はさっそく紫色の麻布で河童をたたいたら、河童はおとなしくなって詫びたので、二度とこの川に住まないことを約束させて、逃がしてやった。

これから熊原川に河童がいないのだという。紫色の麻布は魔除けだといわれている。

三戸町の近く沼尻部落のはずれに、簀が坂沼という沼があり、底知れぬ深さであった。この沼に住む主は大蛇で、雨が降りそうになると、沼の近くの坂に簀と笠に化けてかかっていた。通りがかりの村人は雨に困って、この簀と笠を着ると、そのまま沼に引きこまれてしまった。そこでその坂を簀が坂というようになった。

南部の家来で、玉山兵庫という武士が、これ

を退治しようとして馬に乗って来た。沼に入
て主を捜したが見当たらず、一本の大木が浮
んでいるのを切った。するとその大木は、大蛇
の姿を現わして死んだ。

主を退治した兵庫は、乗って来た馬の鞍くらを沼
に沈めた。これから沼を「鞍沼」とよぶよう
になった。

また沼のかたわらにお堂を建てた。このお堂
を鞍沼明神というようになったのである。

三戸町の豊川というところの旧家に、樹齡五
〇〇年という銀杏いもぎの大木があった。乳銀杏だ
といって、付近の部落からも、乳の出ない女
たちが乳の出るようにとこの木に祈るため、よく詣
でに来た。

同じく梅内うめなに里屋敷りやしきといって、昔、長者百
姓しやうしやうが住んでいたという。あるとき麻布を庭い
っぱいに干しておいて、下女のまん子がひとり
留守をしていたが、夕方になって長者が帰って

みると、布が一反たんたりなかった。

盗んだ疑いをかけられたまん子は、とうとう
沼に身を投げて死んだ。ところがあくる日にな
って、長者が飼っていた雄牛が布を吐き出し、
そのまま近くの長沼に走りこんでしまった。

さて、そのことがあってから、村の夜泣坂の
柳の下に、夜な夜な女の幽霊が現われ、そこを
通る女たちの頭にかぶる手ぬぐいを奪うのであ
った。これはきつとまん子の怨念おんねんであろうと、
村人たちが相談してまん子沼とよんでいる沼の
ほとりにお堂を建て、くしやかんざしなどを供
えて供養をした。それっきり夜泣坂の幽霊は現
われなくなったという。

梅内から泉山の旧道に出て行くと、田の中に
小さな沼があった。寛治元年（一〇八七）、鎌倉
権五郎景政は源義家に従って奥州に下ったが、
この地の戦いで敵将鳥海弥三郎のために、弓の
矢で右目を射られた。

豪勇な景政は、その矢を抜かずに七日の間敵を捜し求め、ついに弥三郎を討つことができた。そこでようやく右の目の矢を抜き、この沼で目を洗った。ところがそれ以来、この沼に住むウナギはメッコ（盲）になり、メクラウナギとよばれるようになった。

三戸町の猿辺さるべという部落に、蛇沼という沼がある。昔、この沼のほとりに大蛇が横たわって、よく村人を困らせた。

あるとき、千葉政義という土地の豪族がここを通りかかって、一刀のもとに大蛇の首を切り落とした。首は二キロほど離れた森の中に落ちた。そこでここを蛇森といい、また沼を蛇沼といったという。

昔、ひとりの旅僧が、猿辺から三戸の町へ越えようとして坂にさしかかった。するとにわかには山賊が現われ、鱒ますを持って来たかといった。そのころ猿辺川から、鱒がたくさんとれたので

ある。

僧は仏に仕える身として魚類は持って来ないという、山賊は怒ってフジづるで僧を木につるしあげてしまった。

僧は死にぎわに、このあたりにフジの花は咲かせないと叫んで死んだ。それからここを旅人坂とよんだが、僧の呪いでフジの花は咲かなくなったのだという。

熊原川をさかのぼって、西へ国道一〇四号線を行く。三戸町から一二キロで、三戸郡田子町たつこに出る。

この道は、やがて県境を越えて秋田県鹿角郡かかくに入り、県北の中心地大館市おおだてに通ずる。昔は南部領鹿角地方の鉱山から産出した銅が、牛方うしかたの引く牛の背に積まれて運ばれ、反対に三陸海岸さんりく地方の塩や魚類が、山国の鹿角に搬入された。だからこの鹿角街道は、南部領内の重要な産業道路だった。そして今は、名勝十和田湖への探

勝道路であり、また白萩平・来満峠および迷ヶ平などの秘境をさぐるコースとして知られる。

田子町の北、長坂というところに、昔、布沼という大きな沼があった。この沼に、ヌノガラミという奇怪な主が住んでいた。

この主というのは、名のとおり布に化けて、沼のほとりの垣根に掛かっている。そして通りがかりの村人が、その布を見つけて取ろうとすると、たちまち伸びて人からみつき、沼に引き入れてしまうのであった。

このために、妻と娘のふたりとも沼に引きこまれたある男が、この主を退治しようと決心した。そして神のお告げによって、ハトの卵を一つ持って沼に出かけた。

沼のほとりで一心に神に祈ると、沼がにわかに音を立てて水が湧きはじめた。このとき、男はハトの卵をこわして沼の中に投げこんだ。すると、大きな音とともに、ヌノガラミの死体が

浮かびあがったという。

田子町の北西にある清水頭という部落から、その奥にある樺山部落の方へ六キロほど行ったところに、鱧掛けというところがある。

山へ入る人は、ここで木の枝をカギ形に作って、道ばたのイタヤの太木に掛けて行く。こうすれば山にはいってもケガをせず、また道に迷うこともないと信じられた。

ところで、田子町の北にある貝守が岳の頂上に、大昔のこと手長婆が住んでいた。毎日この山から遠くの八戸の海を見ていて、手をのばして海中の貝をとって食べていたという。

だから今でも、頂上の岩に婆の食べた貝殻が、たくさんくっついていいるのだという。

これと似た話で、足長の話がある。

同じ田子町の北方で、種子というところから木和田へ行く途中、直径六―七メートルにも及ぶ大きな窪地がある。大昔、足長の大男がやっ